

批判は謙虚に受け止める

人の批判は誰でもしたがるが、人からの批判を謙虚に受け止める者は少ない。批判されて嬉しい人はいないだろうが、しかし第三者の指摘というものは的を射ているものだ。

昔から傍目八目おかめはちもくという。囲碁がへたな人でも、第三者として他人の対局を見ている分には、八目も先まで見通すことができる。

この格言にうなずけるなら、人からの批判は冷静に受け止めたほうがよいという理由もわかるだろう。

嬉しくはない指摘を人からされたら、反射的にムツとするのが人の常だ。しかしそれでは成長の機会を失う。感情の動きを抑えて、とりあえず素直に耳を傾けてみることだ。これは習慣の問題である。

人が意見を述べたら、とりわけそれが耳に痛い指摘であったら、いったん「そうかもしれない」と胸の内をつぶやいてみる。相手の立場に立つとは、そういうことだ。相手の言うことには一理あると思って、最後まで傾聴すればよい。きちんと実行できる人は、それだけで人から一目置かれる存在になる。

「あいつは他人の苦言を冷静に受け止めることができるやつだ」という評価は、それこそ勲章に値するといっても過言ではない。

自分に対する批判に耳を傾けられる人のところへは、忌憚のない意見が寄せられる。どれを採り入れ、どれを聞き流すかは本人の自由だ。まずはすべてを受け止め、そのあと自分自身の判断という篩ふるいにかけて、受け入れるものを決めてゆく。

プライドが傷つくというほどのこともない。十のうち一つでも良い意見があれば、ありがたく頂戴すればよいのである。

言い訳の習慣を改めるには

人から何か言われると、必ず言い訳をするのが癖になっている人が少なくない。そういう人が損をするのは、まさに正当な理由があるときでも、「また言い訳をしている」と解釈され、聞く耳をもってもらえないことだ。

苦言に耳を傾けることと、言い訳をしないこととは、ふたつでセットの関係にある。苦言を謙虚に受け止められる人は言い訳が少ない。逆にすぐ腹を立てる人は言い訳が多い。

かつて批評の神様といわれた小林秀雄に、『無私の精神』という興味深いエッセイがある。有能で説得力に富んだ実業家を扱ったもので、こんなふうに書いている。

「この人には口癖が二つあった。一つは『御尤も』という言葉、一つは『御覧の通り』という言葉である。誰かが主張する意見には決して反対せず、みんな聞き終ると『御尤も』と言った。自分の事になると、弁解を決してしない、『御覧の通り』と言った。この口癖には、ある言いようのない魅力があった」

そうかもしれない＝「ごもっとも」と思って人の意見を聞き、言い訳なし＝「ごらんとおり」と割り切って自分のことは弁解しない。小林秀雄はそれを、一種の無私の精神だと賞賛している。

この境地にたどりつくのは至難の業だが、挑戦してみる価値は大いにありそうだ。

弁解をしなければ誤解されるようなケースは別として、言い訳めいたことは口にしない。そう決めてしまえばよい。言いたいことは行動によって示す。なによりも雄弁に人を語るのには行動であり、行動されなかったことに弁解はいらない。そこまで覚悟を決めたとき、人は凛々しい実行家になれる。